

## A Study on the Design Development of Electric Fan for Home Use in Japan

平野, 聖  
川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部医療福祉デザイン学科

<https://doi.org/10.15017/10325>

---

出版情報：九州大学, 2007, 博士（芸術工学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：

## 緒言

我が国においては、近年、ますますモノによる生活の変化の度合いが高まっている。モノと市民生活との関係についての歴史を調査・研究することは、今後の社会のあり方に大きな示唆を与えるものと期待される。特に「持続可能な社会」の実現を目指すのであれば、人がモノとどう関わってゆくべきかという視座が非常に重要となることは間違いない。こうした観点から振り返ってみると、人とモノとの関わりを中心に論考した先人、S. ギーディオンの(1894~1968)<sup>1)</sup>の大きな存在に気付く。

ギーディオンは『機械化の文化史 (Mechanization Takes Command. 1948)』において、モノ (特に機械) による生活の変化の膨大な実例を丹念に収集することによって、市民生活における近代化の過程につき、「人間にとって機械とは何か」との問題提起を行った。我が国の近代化すなわち過去を考察する際、また将来を見通すためのヒントを得る際、モノの背景に厳然と存在する文化、歴史、技術を総合的に考察するというこの手法は、いまだに有効かつ有意義であり得ると思われる。しかしながら、先行文献にギーディオンの示した視点を中心に纏め上げたものは、残念ながらさほど多くはないのが現状である。本論では、ギーディオンの示した手法を参考にしつつ、我が国市民生活の近代化にモノの果たした役割を考察してゆく姿勢を大切にしたい。

明治時代の文明開化と同時に、大量に欧米先進国からもたらされた近代的な機器類 (モノ) は、我が国の市民生活をそれ以前と大きく変えた。とりわけ、大正時代以降普及し始めた家庭電化製品 (以下、家電製品と略記する) は、市民の日常生活を便利に快適にする役割を担い、時には試行錯誤を繰り返しつつも発達してきた<sup>2)</sup>。欧米先進国由来の家電製品が、我が国において進化発展を遂げてゆくその一例として、扇風機を挙げるができる。

我が国において、明治時代に導入された扇風機は、大正時代に大量生産に移行し、第二次世界大戦後 (以下、戦後と略記する) 一般家庭に広く普及し始めた。我が国においては快適な生活を送る上で、扇風機は今や必需品となっている。ところが、導入が早かった割には、普及の度合いは意外に遅い。統計によれば、1959 (昭和 34) 年には 28.6% だった普及率が 1962 (昭和 37) 年に 50.6% に達している。普及率が 90% を超えるのは、高度経済成長を終えた 1973 (昭和 48) 年のことである<sup>3)</sup>。

しかしながら、主として社史による紹介を是とすることを前提とした文献が多いこともあり、例えば、扇風機の国産機成立過程で我が国中小企業の果たした役割や、普及過程でレンタル制度が導入された経緯、戦前の基本形 (黒色、四枚羽根、ガード付き、首振り機能付き) 成立の過程、ある時期において我が国独自の発展を遂げたガードの意味付け、戦後のカラー化の理由等、導入から現在に至るまでの過程に関し、扇風機に関する情報がさほど明瞭・正確でないまま流布・継承されてきた実態がある。

よって、本論においては、我が国における扇風機のデザインの変遷を辿りつつ、多様な視点から「ひとつのモノの導入から一応の完成までの過程をより正確に紹介すること」を中心に検討を行う。「扇風機」という、一般に良く知られた家電製品を通じて、欧米から導入した製品を国産化し、やがては我が国に適応した製品に進化させるまでの経緯について 考察することによって、我が国デザイン開発の特徴に関する新たな知見を得たいと望むものである。